

氏名	菊地均
学位(専攻分野の名称)	博士(経営学)
学位記番号	乙第893号
学位授与の日付	平成26年2月17日
学位論文題目	シュンペーターの資本主義論に関する理論的研究
論文審査委員	主査 教授・博士(経営学) 田中俊次 教授・博士(農学) 長澤真史 教授・博士(農業経済学) 黒瀧秀久

論文内容の要旨

本論文の目的は、シュンペーターにおける資本主義論に着目し、彼の理論体系に横たわる思想やイデオロギーをあぶり出し、その意義と限界を問うところにある。すなわち、シュンペーターにおける資本主義の発展と変動の形成過程を題材に彼の理論体系に対して様々な光を当てることで、資本主義の基本構造を明らかにすることである。

本論文の構成を述べれば次のようになる。本論文は第1部「シュンペーターの学說的背景」、第2部「シュンペーターの資本主義像とその学說的位置」、第3部「資本主義のパラドックス」の3部構成の全5章からなる。ここで各章の論点とその展開をかいつままで述べれば、以下のようになる。

(1) まず、第1章「シュンペーターに対する評価」では、彼の業績をできるだけ公正に評価し生涯貫いた真の姿を描いてみた。シュンペーターを語るのには、社会科学を語るに等しく、それだけに、シュンペーターの中心命題を論証するのは困難を極めたが、その全体像を先行研究や新たな文献リサーチから可能な限り吸収し、新たなシュンペーター象を描くことができた。ところで、シュンペーターの資本主義論の特徴は何が資本主義の変化を促進したかではなく、所与のものとしている枠組みの変化自体を分析の対象とし、その経済システムの長期的、平均的状況を分析し、不安定均衡の比較静学の意義を問うところにある。

第2章「シュンペーター理論体系の基礎」では、これまであまり注目されなかったことだが、シュンペーターが価値判断論争から何を学び、純粹経済学をいかにイメージし、その後自らの科学観をどのように形成していったかを取り上げた。認識しておかなければならないのは、ドイツ歴史学派がその思想を構築するに当たって、哲学的議論の色彩を払拭し、比較制度史的考察へと深化していった最高の成果がウェーバーの社会学であること

に異論をはさむ余地はないが、その中であって、ウェーバーの歴史社会学が社会的行為の類型化に帰着したのに対して、実証的、細目的な研究過程の究明を目指したシュモラー=シュンペーターによる進化的経済学の流れがあることを看過してはならない。しかし、シュンペーターの考え方は、新古典派やケインズ主義の経済学者にとって次元が違うものとしてこれまで無視されてきた。その原因を探るに当たり、筆者の考察が形式的な分析に偏り過ぎないようにするため、シュンペーターと新古典派やケインズ主義の経済学者との議論の背景にある思想について整理し、その違いを明確にする過程で、これまで解明されなかった暗黙の前提を暴くことができた。

第3章「資本主義における発展と変動の理論的展開」では、これまでの展開と異なり資本主義における発展と変動の形成過程で問題になった「資本主義と企業家」、「社会階級と帝国主義」、「資本主義と景気循環」の三分野に着目し、シュンペーターが資本主義における指導者像をどうイメージしたかを跡付けた。シュンペーターの「企業家」は、複雑に絡み合った具体的な企業家現象を抽象によって一般化して得られたのではなく、彼の階級理解の道具として企業の機能を人格化した概念であることが初めて解明できた。

第4章「企業家とイノベーションの理論」は、いわばシュンペーターの理論体系にとって重要な課題となるイノベーションと、それを遂行する経済主体としての企業家の機能とを明らかにするために当てた章である。まず、ネルソン=ウィンターの「シュンペーター的競争モデル」からわかったことだが、経済成長をこれまでのように単なる資本や雇用の増加、あるいは投資や消費といった最終需要の増加に依存するよりも、企業行動におけるイノベーションと模倣の研究開発(R&D)に焦点を当てたほうがモデルの判断基準として貴重な意味を持つ。したがって、シュンペーターのイノベーションをモ

デル化するには、新古典派経済学のような利潤の最大化や均衡に関する前提を保持するよりは、イノベーションは非日常的にめったに起こり得ないものではなく、日常の業務として組み込まれるという「イノベーションのルーティン化」と結びつけたほうが現実との適合性を有している。ここでは、企業行動におけるイノベーションの新たな役割を上述のごとく発見するとともに、従来の経済学の視点からではなく、経営学やマーケティング理論の視点から検討を進めることで、新知見を展開できた。

最終章の第5章「シュンペーターにおける資本主義論の現代的意義」では、資本主義の経済的成功がかえって不整合な要因を生み出し、これらの要因がやがて資本主義の経済運営を困難にするというシュンペーターの考えに即し、現代的観点からその意義を問い、資本主義の問題点を明らかにした。ところで、資本主義の発展と変動についてはいまだ十分に解明されておらず、シュンペーターよりも遥かに漠然とした貯蓄や投資の理論から一般理論を引き出したり、そうした一般理論を基にもっともらしい政策提言を行なったりする事例が見られる。注意深くシュンペーターを読めばわかることだが、彼は社会主義に対して賛否を唱えず、あくまでも資本主義が成熟して社会主義に移行する論理的可能性を問題にしている。したがって、社会主義を理想として描く立場には立っておらず、「問題のパラドックス」を語っているに過ぎないといえる。

(2) 以上の分析結果と課題を総括的に整理すると次のようになる。

これまでのわが国におけるシュンペーター研究は、彼の純粋理論だけが取り上げられてきた嫌いがする。ただし、それはそれで世界でも類を見ないほど日本の近代経済学の発展に貢献したが、その体系的解釈あるいは批判的分析というところにおいては明らかに偏っている。例えば、既に先行研究としてシュンペーターをウェーバーの類型学とマルクスの経済史観の比較から考量した大野忠男の『シュンペーター体系研究』（1971年）や、シュンペーター体系を総合社会科学から解釈した塩野谷祐一の『シュンペーター的思考』（1995年）などがあり、それぞれシュンペーター研究上で多大なる貢献を果たしたもののだが、本論文で取り上げたような資本主義の発展と変動に着目しその構造を解明するため、あえてシュンペーターの発展理論を体系的に研究し、その現代的意義と限界を問うものではない。

このことが、筆者をして本論文を書かしめるに至った基本的な問題意識である。現代経済学は周知のように、

新古典派経済学のミクロにケインズ経済学のマクロを接合した形で展開してきたため、シュンペーターの経済学に対して慇懃なる無視を続けた。しかし、シュンペーターが描いた与件の学としての「経済社会学」は、新古典派経済学やケインズ経済学が排除し積み残した領域であり、これが経済学のフロンティアを拡大することに貢献する。本論文はこのような枠組みで解釈し分析したため、これまでの先行研究と明らかに異なる特徴を持っている。

結局、シュンペーターの特質と論理構造は理論形成的学説史からみると、シュンペーターの資本主義論は次の二つの点でまさに独創的である。一つは、主流派経済学のような操作性やモデル構築の手法にとらわれず、シュンペーターの理論を、いわば「統一発展理論」として定式化したこと、これは静態理論に対して動態理論を調和させ、また歴史研究を理論研究と対等に位置づけ、経済進化に対して創造的破壊の過程でもって解き明かし、そして長期波動に対して短期・中期波動を組み入れ三循環合成図式でもって景気循環を描くことで、シュンペーターの発展理論として体系化したものである。

いま一つは、シュンペーターが経済学にイノベーションという概念を持ち込み、資本主義を分析した意義を新たに評価したこと、すなわち、従来の均衡の経済学では解けなかった経済成長の源泉を「イノベーション」で理論化し、学説史的に位置づけたことである。

(3) しかし、シュンペーターがこれまで述べた概念を詳細に吟味してみたところ、次のような問題点が確認できたので、最後に述べておく。

筆者がシュンペーターの資本主義と景気変動を詳細に吟味したところ、概念規定に伴う関連性の適合に問題があることが判明した。それは、「均衡の近傍」(neighborhood of equilibrium) という概念である。この概念は、企業家がイノベーションを達成し経済を動態過程に導き、それが「後退」(recession)、「不況」(depression)、「回復」(recovery or revival)、「繁栄」(prosperity) という四局面循環にいう「回復」から「繁栄」をもたらす中点で起こるものだ。例えば、経済は「後退」過程に入り、さらに「不況」過程に突入するが、やがてそれも収束して「回復」過程が始まり、ついに均衡水準に達する。つまり一定の景気変動局面を経た後に達成される新しい均衡点は、より現実に近い対応物だと想定し、シュンペーターはこうして新しく実現した均衡点を「均衡の近傍」と呼んでいる。

しかし、このようにシュンペーターのモデルでは、均衡とその一時的攪乱、そして均衡回復というトートロジー

カルな議論でしかなく、このような見地を貫くシュンペーターの考え方は、均衡の絶対化、すなわち予定調和的な振舞えが想定され、究極には均衡の成立をもって安定した秩序内での循環的変動があるのみである。仮にシュンペーターが、純粋モデルないし第1次接近から、一步前進して現実へ近づいたとしても、こうした現実の均衡は、理論的均衡と異なるので、「均衡の近傍」という概念を用いたのだが、これをいかに理解しておけばよいのだろうか。少なくとも、ある方向に向かおうとする傾向とそれを制約する諸条件との相互作用を通じて、均衡と循環的変動が生ずるメカニズムを提示しなければならない。いずれにしても、「均衡の近傍」によってより現実に接近するためには、これらの「均衡の近傍」と統計的に観察される循環的変動との間に何らかの理論的説

明が必要である。

これとは別に、シュンペーターの統一発展理論を駆使して進化経済モデルを構築する試み、すなわち資本主義をある意味で一つのシステムとしてとらえ、その場合、経済を市場において取引する進化的過程（これは同時に旧システムを破壊する過程）として、知識や技術を創造的に獲得するダイナミック・モデルに基づいて設計される「進化経済モデル」を構築する試みが残されている。おそらく本研究に残された課題は以上に尽きるわけではないが、シュンペーターの多くの業績をたどり直してみようという仕事の中に、筆者にとって何か有意義なものがあるとするれば、従来の経済学に欠落したものを見出し、それが緊急を要する資本主義の立て直しを考える上で、本研究を世に問う意義が認められよう。

審査報告概要

わが国のシュンペーター研究は、膨大な蓄積のもとに一応の成果を収め、世界でも類を見ないほど近代経済学の発展に貢献しているが、その体系的解釈あるいは批判的分析という点においては明らかに偏っている。

本論文は、シュンペーターの資本主義論からその理論体系に横たわる思想やイデオロギーを炙り出し、その今日的意義と限界を問うことを目的に、シュンペーターの発展理論を体系的に研究し、彼の理論を「統一発展論」として体系化した。そこから得られた新知見により、経済システムの長期的、平均的状況を分析し、不安定均衡の比較静学の意義を明らかにしている。また、シュンペーターが資本主義における「企業家」を彼の階級理解の道具として、企業の機能を人格化した概念であること

を解明した。さらに、イノベーションとそれを遂行する経済主体としての企業家の機能を明らかにするため、経営学やマーケティング理論の視点から検討することによって、「イノベーションのルーティン化」と結びつけて現実と適合化させることを明らかにした。

以上の新知見により、本論文はシュンペーターの発展理論を体系化し、その現代的意義を問うた独自のものであると判断された。ゆえにこれらの成果は、今後のシュンペーター研究に新たな貢献をするものとして高く評価することができる。

よって、審査員一同は博士（経営学）の学位を授与する価値があると判断した。